

## 「と なる」の用法

高 羽 四 郎

「成る」が推移・変化の意で使われる場合、結果は「に」で示されることが多く、「入が―所長（有名・病氣勝ち）に―なる」、「物が―道具（邪魔・水浸し）に―なる」、「事が―延期（盛ん・めちやめちや）に―なる」、さらに「期日（暖か・秋日和）に―なる」はただの一斑、引いては「お出で（お勤め）に―なる」まで含められるであろう。「に」はかく全般的な基本の形であるが、時には「と」の用いられることがあり、しかも両形にはどこか違いのあるのが感ぜられる。どの範囲で「と」が用いられ、それは「に」とどの点で異なるのか。前にも一度この疑問を確かめようとして、手元の俳諧資料を取り出してみたのであるが、その時は明解が得られないままに放棄してしまつた。こんど『国文学研究』から一文の勧誘を受けた際、もし例文が豊富であれば、何か手掛りが付くかも知れない、たとえ結論は出なくても資料の提示はできるはずと考へて、また用例の収集に取りかかった。ところがその間に疑問は意外の方向に転換することになった。後世に入つて「ととなる」の使用が顕著に多くなるのである。（臨時的な表示は文末に掲げる）。かくて実例はにわか増加し、観察もそれだけ容易になつたのであるが、問題はこの推移が単なる使用度数の増加を示すばかりでなく、用途の拡大を暗示するものと推測せられることである。もしかりに

従来は常用でなかつた範囲にまで「と」の延用せられる事実があつたとすれば、どの部分へどう拡げられたかが筆者の興味の中心となるのである。しかしその検討はもう限られた時間内には困難である。不安は残るけれども集まつた事例は年代を問わずこれを平面上に分類し、それでもつて「ととなる」の性格を衝きとめるといふ最初の方針を通すことにした。文例はやはり主語によつて分け

A 主語が人である場合

B 主語が物である場合

C 自然現象（物象・天象など）を表わす場合

の三例題を立てて、簡略な一覧を意図した。ところが筆はしゆん巡う回、遅々として進まず、漸くAが終るころにはもう与えられた時間も紙数も切れそうな状況である。やむをえず計画を中途変更、上記のAをさらに両分して別にABを設け、Aで「ととなる」の性格を追求、Bでその再検討、そして最後に疑点を挙げるといふ形で一応体裁を整える他なかつた。かく不満な手違いばかりを先ず白状して、本誌編者へのお詫び、披閱者へのお断りとする。

例題へ入る前に幾つかの名称を定めて、説明の簡便を図りたい。観察は常に「に―なる」との対比という形で進められ、二形が交錯して時に紛らわしくなるので、「原（句）」と「比（句）」の符号を

以て區別する。当面の直接対象である「となる」の例文には「原」を、「になる」の方は「比」を添えて分明を期するというのである。次は觀察の対象となるべき文要素について一言する。主語は既に述べた通りすべて「人」であるからここに論外とする。述部は一般的に言つて動詞単独のこともあるが、多くは助動詞その他を伴つてゐる。ところで助動詞などを含めた全体を一個の単位として扱いたい場合、この全体を「述部用言」と呼んで、「動詞」と區別することにする。例えば「なり十て」「なり十に十けり」をそれぞれ一要素と見なす時、これを「述部用言」の名で示したいのである。最後に文の主要素として残るのは「結果を表わす部分」である。以降の觀察でも結局焦点はこの要素に限られると言つてよい実状であり、言及もまた頻繁になる。それで「と」あるいは「に」の上に来る語（または句）を指す名称として、「補語」という英文法の用語を借りる。「客と（に）・青年と（に）・虚弱と（に）」なる「客・青年・虚弱」を文中の要素として扱う場合、それぞれ「補語」の名目で指摘したのである。前置きが徒らに長くなつた。実例に就く。

主語——人（用）

例題A 補語——人

1 補語が地位・職業を表わす名詞である場合

著はかく身はつふね共ならばやな——越人（霏野七・Ⅱ述部一六）

剛力に成て行はや湯殿山——桃實（陸奥千鳥三・Ⅱ湯殿一八）

金捨て乞食とならば花の色（付句）——東藤（小弓・Ⅱ秋部一八三）

笠敷や乞食になりて花の陰——桃牛（千々之丞・一〇七）

「となる」の用法

醉味嗜あらハ春の野守となり果ん——許六（白院羅尼・Ⅴ右左四）

山僧や花守になり見てに成——申候（伊達衣上・一〇）

涼しさに青物屋とハなりけらし（付句）——路健（東西夜話上・二八〇）

奉公のそみやめて醫者に成（付句）——林鹿（金比羅會下・Ⅴ谷水七）

おなし世に小作となりて秋を泣（付句）——過角（東山墨畫・Ⅰ百韻七）

百姓になりて世間も長閑きよ（付句）——馬けん（続猿蓑上・Ⅲ風一九）

かくて世に四位と成へき身なりしを（付句）——蕪村（一夜四歌仙・Ⅱ白菊七）

浪人になられてからの久し振（付句）——江鶴（位山下・Ⅰ樓一三）

2 補語が身分・資格を表わす名詞である場合

金屏の隠者となりて花の春——木因（袖表紙・二七）

仙人に成か湯入の麗の露——乙由（山中集・Ⅲ諸句四）

見る内に嫁が姑とつゐなりて（付句）——文錦（陸龜下・Ⅱ婦花三五）

ふん切て尼にならうか夏木立——虎道（猿蓑下・Ⅰ夏句八五）

東堂と成てぞ秋もゆたかなる（付句）——尺草（勸進帳下・Ⅱ柳四七）

肝養（煎？きもいり）に成すましたる花見哉——藤桜（會我上・Ⅲ春句一六一）

参考追記

梢焼て友と也けり夜の蟻——若楓（其便下・四三〇）

傘の内近付になる雨の響に（付句）——季風（春日・Ⅰ伊勢二九）

しる人にさつゝとなるや初時雨——佐越（杉丸太・Ⅱ冬句五）

物いふて知己になる清水かな——東香（百思獄二・二七二）

3 補語が年令・性別等を表わす名詞である場合

紙衣着てむかし男となりけり——きん之（滑江話六・四七）

後の月おとこになつてどしつかす——万水（茶草子・Ⅰ諸句二一九）

みなし子と成しおもひや春寒——潮友（白梅・Ⅲ悼句九）

いさ今暮童にならんとし忘レ——トコ（芦分舟冬・Ⅱ冬句一〇〇）

はツ春の人となりけり舞賢——申之（二七九九 須磨明石・Ⅲ諸句三〇）

あのやうな女に成て花の陰（付句）——沾徳（句見弟中・二六二）

4 「人が——どういふ人と・なる」の類形

冬籠人の忘るゝ人となり——馴六(二八一〇) 蘆苞・Ⅱ諸句五五)

我も春の人となりけりはつ檠——丘高(二八〇〇) 花見次郎・Ⅱ諸句三五)

葉窟の初日の客となれりけり——杉風(續別座敷上・Ⅱ春句一〇)

拜まるゝ客となられて彼岸かな——由章(一七九五) 空色集・Ⅱ追悼五五)

花照す金の柱の施主と成り(付句)——史邦(猿舞師・Ⅱ栗花四五)

うつくしき小牛の主となりけり(付句)——宰町(一七九八) 山水行・八〇)

參考追記

若葉して木の間の寺と成りにけり——倚川(一七九二) 続東山方句下・二二五)

二丁来て雪の傘(からかさ)とハなりぬ——紅二(一七七四) 風巾の晴十・一二)

君来ねはこハれ次第の家となり(付句)——其角(庚侯下・Ⅱ秋空三五)

けふは塚にさす鶏頭となりけり——暇けい(一七八〇) 秋の風・Ⅱ悼句九)

藍枕さふい秋とは成にけり——十江(小弓・Ⅱ秋部三五五)

存分に千とりの闇と成にけり——空阿(二八一〇) 蘆苞・Ⅱ諸句一一五)

「人が——という人と——なる」の形、つまり主語も補語も人である文例を拾つて例題 A とし、そのうち補語が地位・職業を表わす名詞であるものを取つて第 1 部に置いた。職業の転換には主体の意志が働くことも多いのであり、「なる」の動義もそれだけ厚いはずと予想せられる。事実この点は 1 の諸文を通過して殆んど自明と言つてよく、しかも原句と比句の間に動義の著しい差は認められないのである。かつ動詞の面は次の第 2 部で考えることであるから、ここでは主として補語の側に注目する。初文原「(落葉掻く)身は・つぶねとも・ならばやな」、比「ごうりきに・なつて(行かばや——湯殿山)」は、ともに願望の表現、文の情意も近似するので、「と」と「に」に格別の相違はないと言ひ棄ててしまふのはまことに簡易であり、また正しいのかも知れない。しかしあとの連関もあるの

で、一応の比較を試みる。原句にはもともと前書きがあつて、「鎌倉建長寺にまふて(詣うで)て」と記されている。この言葉を押して見れば、原文は字句の通り「一人の奴僕になりたい」の意と取られ、「落葉かく」もその心で理解せられる。比句の方は例題にも注記してある通り「陸奥千鳥」から引いた一句である。当時遠遊中の俳人桃隣をその途上に迎えた応接の辞であること、さらにこの作者は那須野の住人であることが同書によつて知られる。そうしてみると湯殿登山は真の「願望」であり、「剛力になる」もただ歓迎の意を表わすあいさつとも推せられる。とにかく職業的な案内者になる意でないことは明白であるから、「荷役をお受けして」ほどに読まれるのも自然である。しかしこの解が単に事実を知つた上での思いなしというのではなく、もともと「に」に一種の働きがあつて、そのために生ずるのだと推測せられる。試みに比句の「に」を「と」で読みかえて見る。そうすると「剛力」は一層具体化することになり、これは多分作者の心意に反することではあるまいか。第二文の原「(金捨てて)乞食と・ならば(花の色)」、比「(笠敷くや)乞食に・なりて(花の陰)」は補語が同一の語、文意の酷似は前掲の場合よりさらに甚しい。言葉で指摘すれば、たちまち謬る類のものであるが、ここでも先と同様の提案をしたのである。先ず比句の方を一顧する。これは「元禄江戸俳諧集」に翻刻せられている一書から借りた句であるが、原文にはやや長い詞書きが付いており、その後半に「……上野の花にあくかれ出て……すする心のもの狂ひとし」とあつて、直ちにこの句が記されている。詞書き最後の四文字は「年どし」と判読せられ、もしそれで誤りないとすれば、

この人の体験は年に一度のことである。断り書きがなくても、「かさ敷く」の語句から当然推測できることであるが、真のこじきになるのでも、またその積りというのでもない。「暫く世外の境地を楽しむ」というのであれば、「こじき」をその風体・心境と取って不可なく、反つて原意に近いであろう。翻つて原句は假想の表現であるに關らず、こは「真に一人のこじきとなる」の意に解するのになければ、「金捨てて」の意味がなくなり、「花の色」も薄れるであろう。假想の方が現実真切というのは奇異のようであるが、「となる」には一つの働きがあつて、それが補語を具体化して見せるのだという假設を置き、なお次例で考える。第三文原「(醉みそあらば)春の野もりと・なりはてん」、比「山僧や・花もりに・なり―見手に・なる」では、事情や条件がすぐ前の例文におけるのと一致するので、要点を指摘するだけで描く。原句は假想表現であるが、その假想内では「真に一個の野守となる」意を述べるに對し、比句は比喩の表現、実際に監視員となり、遊覧客の一人になると言うのではない。そのためであろう、人よりはむしろ役目や行為の面が表出している。もしこの句を突然に示され、平明の解を求められれば、「山に住んでいるので、時に見張りもできれば、眺めもする」に近い答えが出るのではなからうか。以上の三例で觀察しえたところは、「になる」の用途が広範であり、各種の補語を自由に容れうるところから、その捨象を拒まない(対比上補語の抽象化を強調しすぎたかもしれない)のに比べて、「となる」の用法には限定があり、補語を具象化して見せる働きがあるということであつた。しかしこの働きを指して、単に「一個の具体的な個体を指定する」と言

## 「となる」の用法

つただけでは、「となる」の特色が完釈せず、何か見落しのあるような不満が残るのである。続く二例で一層の吟味を加える。第四文原「(涼しさに)青物屋とは・なりけらし」、比「(奉公の望みやめて)医者に・なる」は、これをどう解するにしても、補語の実義に差がある―「青物屋」はその人を表わし、「医者」はその職を示す―などと強弁することは許されない。補語は等しく具象義であるのに、なお両文には違いが見えるのである。原句の方から検討する。文面の全体から「世の職業は種々あるのに、とりわけて青物屋などになつた」の意が汲みとられ、「青物屋」は選択の結果、「涼しさ」はその理由として聞きなされる。そして「と」はかかる選抜指定の意に参与していることが予想できる。一方後句では武家奉公を断念したあとの職業が客觀的に取り次がれており、「医者」が取捨の結果というような主張は認められない。「と」には限定的(あるいは求心的)、「に」には説明的(あるいは遠心的)な効果の感ぜられるのは、恐らく取捨選択する意の有無によるかと想像せられる。なお次例とも考え合せる。第五文原「(同じ世に)小作と・なりて(秋を泣く)」、比「百姓に・なりて(世間も長閑さよ)」の「小作」と「百姓」とは殆んど同義の語、実義に厚薄の差の少いことは前例以上である。さらに文意もその人の現職を取り出して現況に言い及ぶ点、両句はまことによく似ている。しかしここでもいまま述べた類の相違が指摘せられる。比句においては「百姓」が境遇變化の偶然の結果の如く扱われており、しかもそれはただ主体の現存を説明するだけに用いられている。原句には「生れつく」(あるいは「成りさがる」)べき職種に事欠かぬはずなのに他でもない小作

などになってという類の表明がある。ところどころかかかる対比・選衡の意は必ずしも文表の語句「同じ世に」「秋を泣く」からばかり派生するのではなく、もともと「と」に固有する規定的な用法によっても支えられているのだと推せられる。どうも「と」には比較・考量・選定するという意味での特定化の働きがあり、さらに補語を殊別化 (Specify) するのが「となる」の著しい機能であるように感ぜられる。いまこの観点から1部末文の原句を読んでみる。「かくて世に―四位・となるべき身―なりしを」に漂う一種観想の念は「と」に負うところの多いことが認められるのである。この問題はしかし幽微、「殊別化」は未熟の語、にわかに明確を期することはせず、あとの検討に譲る。次には補語と並んで一つの要点である述部の問題へ移る。

第2部では人の身分や資格を表わす名詞が補語に当てられている例文から少数を引いた。この場合「なる」の表意には主体的な行動面と客観的な自然推移の面とが互いに交錯出沒することになり、それに応じて述部用言が動静の二義に分れる傾向を見せるのである。しかもこの分離には「と」と「に」が関係すると見られるので、それを中心に観察を進める。初例原「(金びよりの) 隠者と・なりて (花の陰)」はもとより過去における隠退の事実を伝えはするが、文意の主眼はしかし身分の転移ということより裕かなこの人の現境に掛けられている。そして「花の陰」も明かにその心で結びつくのである。これと対比すれば比句における動義が顕著である。「仙人に・なるか (湯入りのひげの露)」とはあごひげの零くほどに温泉に浸ったのを戯れて、「せん人になるか」と言ったのである

う。登仙するかしないかがいまは問題なのである。述部用言が前文では結果の状態義、後文では変化の動義へ分かれており、この相違は一方が完了形(「なりて」)、他方が現在形未来義という表現の違いに原因することは言うまでもない。ところで一度文意に動静の差が現れると、こんどは動義の方へ「に」が、静義には「と」の付く傾向のあることを先ず提示して、なお吟味を試みる。第二例の原「(見るうちに) 嫁が・しゅうとと・(つい) なりて」、比「(ふんぎって) 尼に・なるるか」でも、用言の示す条件は前例と同類でありながら、動静二義への隔りはさらに一層開いている。原句も一見したところ推移を述べる文意のようであるが、やはり「なりて」は結果の状態義に用いられており、目に映るのは現象よりその人の姿である。(本来ならば「変化」の様相を述べるはずの「見るうちに……つい」の語句さえ状態を強めるような効果になっている。)

ここで用言が静義化する理由は、よめがしゅうとめになるという類のいわば一種の自然推移を、しかも客観的に取り次ぐ表現だからであろう。注目したいのはかかる条件下で「と」が用いられているということである。一方比句では主体の動意が文面に著しく、「ふんぎって……なるか」がそれを告げると言えは足りるのである。第三例原「東堂と・なりてぞ (秋も豊かなる)」、比「きもいりに・なりすましたる (花見)」においても事情は前と同様、繁説するまでもない。原句は「東堂(禪寺の長老の称号)」「大言海」の現況を、比句は「世話役になる」の意志行為を表明していると言うにとどめる。例題2部にはなお疑問の多い一文を追記しているので、それを一顧したあとで概括を試みたい。参考例原「(ほど焼いて) 友

と・なりけり(夜のアリ)」、比「(かきの内) 近付きに・なる(雨の暮)」では動詞と名詞の相互關係が妙に入り組んで、適確には捕えがたいのである。しかしその点に関する検討は徒らに煩らわしくなるので、いまは差し控えたい。それより疑問なのは「友となる」「近付になる」が当時の成句だったかということである。(それぞれ類例あるいは類形があり、それも二・三個という少数ではない。)もし慣用語だったとすれば、上記引用文の「と」と「に」も単なる伝襲ということになるであろう。しかしまた例文を通覧すると、「になる」の用法には動義の著しいことに気付くのである。例題には「になる」の類形一個ずつしか掲げていないが、例えば比一文と読み比べれば、原句における状態義は否定しがたいのである。やはりここでも「になる」は主体的な行為の表現、「となる」は客観的な状態記述という、二者の性格は残るものとしておきたい。

以上第2部で重ねて反問した点は、「となる」と「になる」には少違があり、前者は客観的な変化に関する結果の方へ、後者は主体的な意志行為に関する動意の方へ、表意が傾き易いということであった。先に1部では「となる」が補語を具象化して見せる傾向のあることを確めた。この二面を総合すると、「となる」で導かれた補語は、自然推移の結果(a)を指し、かつ具象的な個体(b)を示すという結論が出るはずである。改めて例題1・2を検し、この結論は大よそ妥当することが認められる。しかもそれだけでは不十分、「となる」の特殊性を解明しない恨みが切である。これは1部後半でも触れたことであるが、「と」「に」の持つ特殊化の働きを取り落して

いるからであろう。いやそれだけではない。比較・考量・選択などは主観の評価、それを取り落したということは、人の言葉は多少とも価値の判断に基くという要件を忘れたことになるであろう。次の部へ移つて、必要な修正を加える。

第3部では補語が人の性別・年令等を表わす名詞であるような例文を求めた。人の発育や成長は自然の展開、直接には人為の関与できない種類のものである。従つて「おとなになる」というのは当然客観的な記表のほうであるが、実際には主観の表明となつていることも多い。そのうえ比喩的には「おとなが子供になる」のような言い方さえ行われている。引例は少数であるが、その間にも話者の態度が僅かに主観と客観とに分れ、「と」と「に」もまたその影を映す跡が窺われるかと考へる。先ず1部と2部で認めえた事象を再検し、さらにこの点へも観察を進めてみたい。初文原「紙子着て一昔男と・なりにけり」、比「(後の月) 男に・なつてどしつかす」は構文の平行する二文、その点を捉らえて吟味に入ることとし、比句の方を先に検討する。従文「男になつて」は、要するに態度を表わす副詞句なのではあるが、「男として・男の如く」という類の静義ではない。「男になつたように(積りで)」というほどの動義はなおも残されている。ことに主文の動詞「どしつかす」が極めて鮮明な動作を見せるので、引いて従文も活動するようであり、この「なる」には意外なほどの動義が働いているかと感ぜられる。(音声のことにはとりわけ疎いのであるが、この「なつて」の部分に音の強勢を置いてみる。必ずしもそれが不自然でなく通るのではなからうか。原句の「なり」を強めるのは奇異な感じがするのである。も

しそれが事実であれば、この違いがまた文中機能の差を示すとも言  
いえられる。次は補語（「男」）の方へ目を移す。この一文は女  
の人に関する記述と察せられ、従つて「男」は初めから形容として  
使われていることが知られる。さらに「なる」の変化義が表われる  
ことになれば、「男」はいよいよ抽象義、「男性のような態度・心  
性」と解するより他なくなるのである。先に1・2部で認めた「に  
なる」の性格―動詞の動義化及び補語の抽象化―はここでも変らな  
いことが確かめられる。これと原句を対考する。主文「昔男となり  
にけり」も変化を述べる詠嘆文の如くであるが、読み返してやはり  
文意の主点は結果の状態にあることが見直される。一度この部分を  
状態義と取れば、こんどは従文「紙子着て」も静義化し、本来は理  
由文でありながら、実績はこの人の風体を記すだけの修飾部の如く  
になるであろう。（逆に従文の動作を強く解し、さらに主文の「と  
」を「に」に置き替えてみる。それぞれの場合に生ずる文効果は試  
みに検せられたし）。前後の部分の主張がかく押えられることにな  
れば、その間に立つ「昔男」が際立つのも当然である。注目したい  
のは、単に一個の人物がここに顕然するというだけでなく、この人  
の特性―古代風儀・雅び等―が暗に今の世の人と対比的に指摘主張  
せられていることである。ところでこの句はかかる雅び男になった  
作者の感想表現である。「と」は特殊な性格を指定するにとどまら  
ず、その特性に対する主情表現にも与つていると言いえそうであ  
る。次例で重ねて考察する。第二文原「みなし子と・なりし（思い  
や―春寒み）」、比「（いざこよい）わらべに・ならん（年の暮）  
」で、原句は師とする人を失つた時の心境、身を孤児に比している

のであり、比句はもとより歳末の感想、童心に帰ろうと言うのであ  
らう。用言の静・動、名詞の実義の差は前文に見えるより遙かに分  
明、その点への重言は避けて、主情表出の面に注意する。どちらも  
一人称に関する表現であり、どちらも作者の感想は推移の結果であ  
る境遇に寄せられている。しかも主観の態度には少差があり、それ  
に応じて「と」と「に」の使い分けが見られるのである。比句でも  
「童」は当然「大人」と対照せられるわけであるが、それは全文の  
大意から生ずることである。話者の関心はかかる身分の違いより、  
童心へ帰ろうとする動意にあることが明かである。助詞「に」はた  
だ到達の目標を指示するに過ぎず、比較選定の意などを暗示してい  
ない。原句の場合は恐らく「身寄りの多い人」との対照から「みな  
し子と」と置かれたのであろう。さらに作者の感想はかかる境界に  
立つたその身の孤独という点に向けられていることも感じ取られ  
る。こう見てくると、「と」は補語が内示するある特定の性格に対  
する評価を表わすための付属語と極論することさえできそうであ  
る。第三文原「初春の↓人と・なりけり―なすな売り」、比「あ  
のような↓女に・なつて（花の陰）」は、ともに第三者の自然展開に  
関する記述、そのうえ結果した人の特徴はそれぞれの語句で規定せ  
られている。文形も内情も極度に近似する二文、たとえ差別はある  
にしても、疎雑に取り出さない方が穏当かもしれない。しかしこ  
でも前例におけると同種の提言を試みたい。眼前の人物を紹介する  
という点で両句は等類であるが、主観の評価には僅かな片寄りがあ  
り、一方では「早春を象徴する種類」というほどの性格面に、他方  
では「美しい女に成人した」という類の変化面に傾いていることを

感ずる。この例文のように補語が具象義を示し、さらにその特性が文面に明記せられている時には、「になる」の用法が最も「となる」へ接近するのであつて、上のような弁別もはたして適切か否かは不安である。ただ「になる」の場合には、この形は例外と見て大過ないと言いつるのである。多面な用法中この類形はいわば偶然のものであり、しかも数多い例文中の頻度も低いことが認められるからである。これに対して「となる」の場合は、類例の頻度も高く、殊にその表現形式が注目せられるのである。例題でもことさらに第4部を設けて、事例の若干を掲げているので、次はそれへ移る。

第4部の最初は「(冬ごもり)人の忘るる↓人と・なり」の一文である。眼前の人物、「世から忘れられた」というその人の性格、さらにそういう境界に立つた主観の感慨はこの句に明白である。拙文の初めから繁雑を重ねて追跡してきた「となる」の機能は、要するに変化の結果を具象的な個体として示し、さらにその属性の一つを挙げて特異性を強調するということであつた。ところどころかかる属性は既に補語の概念中に含まれている場合も多く、その例はこれまで観察してきた通りである。時にはその特性が文面に提示せられ、「人が↓どういふ人と・なる」の形を取ることがあつて、その例の少くないことはいまも述べた通りである。4部に引いたのはその一部、事情は何れも大同小異であるから、個々への言及は省略して、ただ末文だけを取り出す。「美しき小牛の↓主と・なりにけり」のような表現を参照すれば、「と」の持つ殊別化の働きが一層明確になるかと思う。第4部にはなお参考として物を主語に取る例、天然現象に関する例をも追録しているので一考しておく。この場合は主

「となる」の用法

語と補語とが同一の名詞となる結果、主語が省かれ、例えば参考例の最初

若葉して木の間の寺となりけり

のような形を取ることが多いのである。主語として「寺」の一語が隠された表現というに過ぎない。しかも文中「木の間の」の印象が極めて鮮明、引いて「と」の主情表出も顕著になっている(比較 寺は木の間にけり)。もともと「と」には殊別化の働きがあつて、そのため第4部諸文のような表現形式が誘導せられ、やがてそれが一個の類形として展開するに至つたと言つて誤りないであらう。なお文末で再びこの問題に触れる。

主語——人(二)

例題B

補語——人以外のもの

1 補語が動物・超自然的存在である場合

蝶と成て侍従の君やねたむら(付句)——土朗(鳶眼・土生駒三三)

蝶になる蝶なるふと枕して(付句)——歌三(東山万句上二〇)

聖霊とならで越けり大井川——許六(韻塞上・X七月一九/鏡別座敷上・W秋句五〇)

たちまちに鬼に成うと打らる(付句)——涼菟(潮とらみ・II十月二二)

2 補語が物である場合

釈迦八十めてたき繪とそならせける——乙州(狐松・I春句三三)

夕顔の小家も今は繪になりて付句)——支考(西室集上・一九)

壁か家唐画になりて時雨かな——子燕(しぐれ集・二七)

一話則ぬけて拾となりけり——暁井(一七三二・北國曲・二〇三)

いつとろに拾になりや黒木實——其角(韻塞上・W四月四/水平目下・II春句一三三/類柑子上・二四三)

3 補語が抽象名詞である場合

老となつて知るや埋ミ火の埋ミ味——文山（二七九三）世の華三・五七四）  
やとひ猫うかれころと成る夜鏡——秋香（一八〇〇）花見次郎・Ⅳ諸句三四）

すまふとる心になりぬ秋のくれ——尚白（其袋下・Ⅰ秋部一〇三）

明方は旅の氣になる月見かな——車庸（流川集・Ⅳ秋部三）

つらくも子供分限となりけり——二梅（二七六八）百里鶯二・四一四）

園分寺は花分限者になられたり——巴陵（板びきし・一〇六）

大吼で猫のわかれと成に覺——古律（二七九五）春の音・Ⅰ諸句二）

花盗人親しき中と成にけり（付句）——風止（二七九四）水月一變・Ⅰ諸句三四）

例題Bでは補語に「人以外のもの」が当てられているような例文を求めた。比喩の用法はあるにしても、人が虫や物になるのは異数のこと、例題として立てるのもおかしいのであるが、目的はそれらを借りて従前の觀察を確かめる材料とし、また補語の捨象という問題への手掛りとしたのである。

第1部には補語が動物、そして超自然的な存在である事例を一つずつ引用した。吟味の順序として、先ず述部用言における動靜の違いを検討したのであるが、事象は引例を一読して明白なので、ただ初文だけを取り出す。原句「チョウと・なつて」待従の君や・ねたむらん」で、「なつて」が狀態義へ移つているので、従文はそのまま「チョウとして・チョウの姿で」というほどの働きに転じていること、別に断るまでもない。比句「チョウに・なる／チョウに・なろうと・まくらして」では、チョウへの変身が主眼、しかもそれを強調せられているので、従文がかえつて主文「まくらす」を押えるような形勢である。補語の実義に大差の見えない場合は、用言の

実義に厚薄が生じ、「になる」は動義を現じ易いのに対し、「となる」はおおよそ靜義、そして補語の具象化を促がすというこれまでの觀察がここでも妥當するとしてよいであろう。

第2部では物が補語になっている珍しい例を取つて、名詞の方の吟味に当てたい。初文の原句は「しやか八十めでたき絵とぞならせける」、比句は「夕顔の小家も今は絵になりて」の形である。原句は眼前のねはん絵を指して、しよかの化身と見た表現であろう。この「絵」は具体的な一枚の図と解せられ、なおその性格が「めでたき」で規定せられている点に注目する。比句はユウガオの花が咲いて小家にも見所のあることを言うのであろう。「絵」は比喩、「絵のような状景」の意に解せられる。（この解にはちよつと疑義が挟まれるので、例題には一層明確な一文を添えている。「絵になる」があるいは「美化せられる」意の慣用句だったであろうか）。補語は「となる」において具象義、「になる」においてはしばしば捨象する事実がここでも變動していないことが知られる。疑問なのは次句の原「（一話則抜けて）あわせと・なりにけり」の言い方である。「一話則ぬけて」は、あわせの綿が抜かれるに掛けて、修業の一関門を越えたことに言い及ぶほどのことかと推するのであるが、問題にしたいのは「あわせと・なる」の用法である。例題A4部の参考例における如く、「衣服」などを主語に予想するのは不自然である。主語にはやはり人を補うのが隱当と考えられる。それにしても前文の場合のように、人があわせとして存在する意に取るのもまた奇異である。どうしても「あわせ姿になる」意と読まれるのであるが、それならば比句の表現通り「あわせに」とするのが当時の慣

用、今日でも常用と感ずるのである。(比句は狭い観察中に気付いただけでも、三編者による三書に記載せられ、もとより何れも「に」を明記している。「一斉に」と並んで「に」の重なる音調のことはあつても、「あわせ」となどの表記は論外のことではなかつたか。)  
「となる」の用途は当時広がる傾向にあり、上記「あわせ」との用法もかかる展開の途上に現われた一例外かとも疑われる。

第3部では抽象名詞を補語に持つ例文を求めようとした。事実かかる例も少数ながら散見するのである。(これまで「となる」の補語は具象名詞という面を強調しすぎたかを恐れる。物を主語とする例題に入つて再検討、おのずと修正せられる予定になつていた。)

もちろん人を主語に持つ例はさすがに得がたく、例題には擬人化の明白な動物に関する表現をも援用した。ここでしばらく補語の捨象という問題を措き、その前に一般的な疑問を提示したい。

前書きにも一言した通り、「なる」の用例を集めてみると、元禄から後世へ下るにつれて、「になる」に対する「となる」の頻度が著しく上昇するのである。今日までに得られた用例数を表示する。

A (元禄)	四四八 (八五%)	甲「になる」	甲十乙
B (寛政)	一一八 (五三%)	乙「となる」	五二九

摘要一 Aの行には元禄元—十二年(二六八—一六九九)間の俳書七十二部から得られた「になる」(甲)、及び「となる」(乙)の実数を記し、さらに甲乙の和に対する比率をそれぞれ括弧内に加えた。B行も同様の趣旨で、寛政元—十二年(一七八九—一八〇〇)の俳書四十七部から求めた結果を記した。

摘要二 再確認した数値ではないので、若干の誤差は当然予想せられる。さらに絶待数は今後とも増加するはずのものであるが、甲乙の比が元禄年間では大約六対

## 「となる」の用法

一、寛政年間では一対一という程度の信頼は寄せられるかと思う。

上表で明らかなように「になる」に対する「となる」の頻度は元禄以後の百年間に著しく高くなるのである。「に」の代りに「と」が使われるようになったと言えよそれまで、まことに知れきつたことであるが、このためにはしかし話者の態度にも僅かな変化があつたはずと予想せられる。「になる」は推移の結果をただ記述するにとどまり、「となる」はそれをさらに特殊化して示す働きのあることは既に実検した通りである。後者の表現様式が次第に選ばれるに至つたということは、作者の態度に一種の分析的な傾向が強まつたことを意味するであろう。俳諧の用例においてもかかる動向が微かに窺われるのであり、その一証として例題A第4部の類形を挙げたい。「人が↓どういふ↓人と・なる」の言い方は決して後世に限られたものでない。しかし実例は初期より遙かに多くなるのである。目的は別にあつたので、A4の引例は初期に比較的厚くなつているが、例題に見られる比率以上に後期のものが多いのである。ことさらに添えた西暦年号は、その句の出所が後世の俳書であることを示す印しである。

「となる」が頻用せられることになつて、次に予想せられるのは用途の拡大である。以前は慣用でなかつた方面にまで「となる」が延用せられ、ことに抽象名詞との結合がかかる推移の一結果ではないかと疑われるのである。先に言及して、論を転じたままになつてゐるB3部へ帰る。たまたま引用することのできた例は後世のものばかりであるという一事を指摘するだけで、いまは補語捨象の問題を保留する。物を主語にする例文について、改めて考察するのが適

切と考えられるからである。

以上を以て、俳諧の狭い分野における、不備な調査の中間報告に代える。今日「となる」の使用範囲は広げられ、補語の実義とは余り関係なく、僅かに殊別化の働きという特徴によつて、「になる」と平行流用せられている。かかる用法の由来については、もつと広い領域に渡る、さらに古い時代までの調査に拠るべきこと論を待たない。

借用した翻刻書目を追記する。居ながらにして善本が参照できるのは、思えばせいたくなこと、先人の余恵を感じて。

古俳書文庫——東山万句

蕉門珍書百種——柿表紙・山中集・杉丸太・曾我兄弟

俳書集覽——其便・小弓・伊達衣・猿舞師

俳書大系——勸進牒・北国曲

古板俳諧七部集——春日・荒野・炭俵・続猿蓑

俳書双刊——続別座敷・流川集・孤松・簗笠・金比羅会

元禄江戸俳諧集——千々之丞・水平目

なお『茶の草子』は藤園堂所蔵の原板本を借り出したことがあり、その時対校しておいた本文を用いた。その他は私蔵本に拠る。